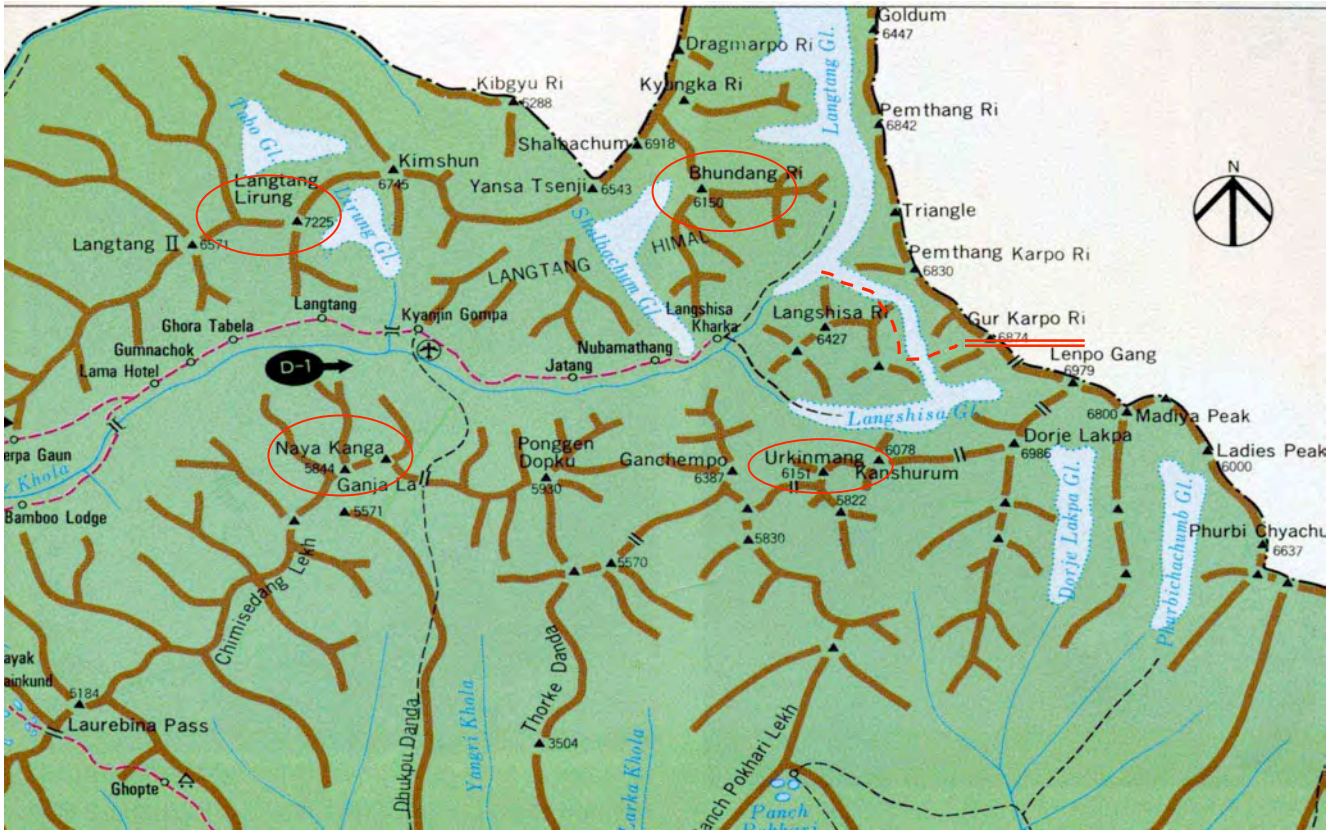
O C U A C

大阪市立大学山岳会会報　No. 5 3　　2011. 12. 17

グルカルポ・リ周辺図および登山ルート
[ランタン山群：グルカルポ・リ]



表紙　　写真：創立９０周年祝賀会　風景
表紙裏　　グルカルポ・リ周辺図および登山ルート（写真）

目次

		頁
ネパールヒマラヤ		
グルカルポ・リ登山報告	伴　明、佐々木　惣四郎、兵頭　渉	１～　７
アンナプルナ・トレッキング	福山　昇二	８～１０
ヨーロッパアルプス		
シュレックホルンと震災と	山田　裕敏	１１～１２
ドロミテ、サンモリッツトレッキング	上田　忠士	１３～１４
創立９０周年祝賀会が開催されました！	山田　裕敏	１５～１６
書籍の寄贈について	奥田　寛	１７
アイスランド紀行	佐々木　惣四郎	１８～１９

裏表紙裏　　写真：グルカルポ・リ登山：Ｃ１’～Ｃ２’周辺からの眺め
裏表紙　　写真：ヨーロッパアルプス
・シュレックホルン山頂にて（山田　裕敏）
・トレ・チメ北面（上田　忠士）

（ランタン・プロジェクト）

「グルカルポ・リ（６８９１ｍ）登山隊２０１１秋」未登報告

伴　　明

グルカルポ・リは、ランタン・ヒマール、ランタン氷河左岸に位置し、モリモトベースキャンプ（４５７２ｍ）から見ると、北のペンタンカルポ・リ（６８６５ｍ）と南のランシサ・リ（６４２７ｍ）にはさまれた東方に伸びる長大な氷河の奥に、ドーム状の偉容を際立たせて天空を限っている。

１９９８年秋に北大山岳会隊が北西稜に達したが頂上までの稜線をたどれず撤退、２００７年秋にはランタン・リを諦めたフランス隊がグルカルポ・リの正面にルートを開拓し４００ｍのヒマラヤひだ雪氷壁を登って頂上に達した。

ランタン・プロジェクトの一環としてグルカルポ・リを候補にあげ、フランス隊と同ルートを取って頂上に達する計画を立て、２０１１年春決行と決めた。その直前３月１１日の東日本大震災により計画を半年延ばし、２０１１年１０月日本を出発することになった。

結果は５６２７ｍまでの未登に終わった。メンバー、シェルパの体調良好、Ｃ２Ｃ３用のテント／食料／登攀用具すべて荷上げされたＣ２’デポサイト（５５４４ｍ）にて、１０月２１日たった１日降り続いた１２０ｃｍの積雪によりＣ２プラトーへ上がる二つのルートのいずれもが表層ナダレの危険増大し、退却のやむなきに至った。夜間マイナス１６度のＣ２’デポサイトで過ごした６夜は、凍りつくテント内で３人共１時間半ごとに目覚めて小便に出るという地獄、昼間は２１日以外快晴の氷河内温度は連日３０度近くまで上昇するという天国、毎日の気温は天国と地獄を行ったりきたりと忙しかった。

以下は未登の報告である。

期間　：　２０１１年１０月３日日本出発～１１月７日帰国。３５日間。

メンバー　：　伴　　明　　（７１才）・・・大阪市立大学山岳会会員
　　佐々木惣四郎（６９才）・・・　　同上
　　兵頭　渉　　（６３才）・・・　　同上

シェルパ　：　ミン・テンバ　　（３０才）
　　パサン・シェルパ（３６才）
　　サンゲ・シェルパ（３６才）
コック　　：　ダワ　　（４０才）
キッチンボーイ：　２名
ポーター　：往３名、復なし。
ろば　　：ドンチェ→モリモトＢＣ　１０頭、モリモトＢＣ→シャブルベシ　７頭。

費用　　：１．テント、登攀用具他共同装備用山岳会特別費　￥５５２，４３２．－
　　２．メンバー個人負担金　￥６４３，８７８．－／名

１０月３日　伴、兵頭は成田発、佐々木は関空発→ＢＫＫ着。￥２．７／ＢＨＴ．
　　空港近くのＧＲＡＮＤ　ＩＮＮＣＯＭＥ　ＨＯＴＥＬ泊。
１０月４日　ＢＫＫ→ＫＴＭ。ＴＩＢＥＴ　ＧＵＥＳＴ　ＨＯＵＳＥ泊。
　　￥１．０２／ＮＲＰ（５０年前はなんと￥５０．－／ＮＲＰ！）。
１０月５日　カトマンズは１週間続くダサイン祭りで官公庁他休み。
１０月６日　ごく最近６８００ｍ以上の登山料が１４００ドルにアップされた。
　　グルカルポ・リはＥＸＰＥＤＩＴＩＯＮ　ＭＯＵＮＴＡＩＮ扱いとなりリエゾン・オフィサー代１８００ドル追加、シェルパ、コックの保険代アップ、以上の条件を満たした上で観光省登山局（ダサイン期間中特別オープン）デペンドラ課長より登山許可取得。

１０月７日　　カトマンズを貸切中型バスにて出発、トリスリ経由ドンチェ泊。
１０月８日～１４日　毎日晴天。
ドンチェ→シャブルベシ→ラマホテル→ランタン→キャンジン（キャンジン・リ手前のピーク４４００ｍまで高度順化）→ランシサ・カルカ→モリモトＢＣ着。ドンチェ→モリモトＢＣまでろば１０頭に５０～６０ｋｇ／頭の荷物をかつがせる。モリモトＢＣ（４５７２ｍ）をグルカルポ・リ登山隊のＢＣとする。ここは一辺２００ｍ正三角形の平坦な草地で、左側に６×８×８ｍの大岩があり、東辺に小川、朝夜は凍る。モリモト・ピークが西空に頭を出してヤクが草を食むすばらしいテントサイト。
１０月１５日　晴れ時々曇り。
ＢＣ　08：40→Ｃ１’デポサイト（４８１８ｍ）12：30→ＢＣ　16：40
ラマホテルから３人とも毎日ダイアモックス１錠飲んでおり以後も飲み続けるが、高山病らしき症状まったく現れずＳＰＯ２も９０前後、ただし毎昼夜小便の出る回数きわめて多し。ここＢＣはランタン氷河本流右岸にあり東のグルカルポ・リから幅３００ｍほどの氷河が直角に合流する地点。この氷河に入って山なす土砂、岩石、岩屑の間をうねうねと登り進む。４時間かかっても氷河内の雪線に届かなかったが、ひとまずそこをＣ１’デポサイトとし荷物を置いてＢＣへ戻る。ここからは純白でヒマラヤひだの厳しいキュンカ・リがモリモト・ピークの北に見えた。ランシサ・リを目指すフランス隊４人がこのサイトにＣ１を張っていた。
１０月１６日　晴れ。朝マイナス３度。
休養。コックのダワはマッシュルーム／トマト／チーズ入りピザとかアップルパイ、ケーキを作ってくれ、おかゆもよく出るが、いつも３人では到底食べきれない量を作る。シェルパのパサンはエヴェレスト８回、ランタン・リルン東南稜を２００４年岩手の山岳会隊含め２回頂上まで登った経験あり。サンゲはダージリン登山学校の教官でこれまたエヴェレスト数回、氷壁登攀のヴェテラン、どちらもボッカ力は日本人の倍以上あり。サーダー格のテンバはノドにデキモノができてＫＴＭの病院通い。ドンチェまでの隊荷の搬送、ドンキーの手配をやった後ＫＴＭに帰り、１０月２６日Ｃ２’デポサイトからの撤収日にＢＣから上がってきて以後ＫＴＭへの復路に同行。
１０月１７日　晴れ。朝２度。
ＢＣ　07：45→Ｃ１’デポサイト　12：40
コック、キッチンボーイをＢＣに残し、３メンバー、２シェルパ、１シェルパ見習いでＣ１’デポサイトに上がりテント２つ張って泊まる。西方、シャルバチョムが東面の岩壁を鎧のごとく張りめぐらして大きく見える。ここは、北側ペンタンカルポ・リのアイスブロックを累々と連ねた側壁と、南側ランシサ・リの側壁の間の大きな氷河のど真ん中に位置している。
１０月１８日　晴れ。朝０度。
Ｃ１’デポサイト　8：15→Ｃ１（５３００ｍ）　12：15
３人のシェルパでテント、食料、登攀用具すべて荷上げしてくれ、メンバーは個人装備／カメラ／通信用具／薬品などをかつぐ。兵頭 23Kg、佐々木 20 Kg、伴 10Kg ぐらい。Ｃ１へは氷河の土砂、岩屑に積もった堅雪の上をゆるやかに登っていく。左からはペンタンカルポ・リ上部にアイスブロックを連ねた雪岩まじりのルンゼが多数この氷河に落ち込んでいるが、ブロックナダレはほとんど起きず、ルート上もナダレの心配はない。右のランシサ・リからのブロック崩壊もない。西方には北から南へキュンカ・リ、モリモト・ピーク、シャルバチョム、ヤンザ・ツエニー、ランタン・リルンが勢ぞろいしている。
１０月１９日　晴れ。朝マイナス４度。
Ｃ１　10：15→Ｃ２’デポサイト（５５４４ｍ）12：30→Ｃ１　14：00
全員で荷上げ。Ｃ２’デポサイトはこの氷河のどんずまりの雪原で、真正面にＣ２（５８００ｍ）予定プラトーへ上がる２００ｍ高さのブロック状氷壁が連なり、その左寄り正面に逆くの字の雪のルンゼがスベリ台状に光ってみえる。東南の方向にはドルジェ・ラクパの北稜／西北稜／西稜、ウルキンマンの北稜、、南側はランシサ・リの東稜側面でフランス隊がテントを張った雪原が見える。北の方向にはペンタンカルポ・リとグルカルポ・リとの間の氷河がせりあがり、北大隊がとりついた北西稜が望見される。

１０月２０日　晴れ夕刻より雪。朝マイナス２度。
Ｃ１　08：30→Ｃ２’デポサイト　10：00
全員で氷河最奥雪原のＣ２’デポサイトに上がりテント２張りで泊まる。Ｃ２Ｃ３用のテント／食料／登攀用具すべて集結。夕刻より降雪チラホラ、１２日間続いた晴天がくずれる気配。
フランス隊はブロックのかけらがテントを襲ったとかで全員引き上げてしまった。
１０月２１日　終日雪。風はなく深々と降る。深夜マイナス１６度。
１０月２２日　晴れ。
昨日１日間の積雪量は浅い所で８０ｃｍ、深い所で１２０ｃｍ。Ｃ２プラトーへ上がる正面逆くの字ルンゼ左側は、見るからに表層ナダレの起こりそうな気配がありありとしており、すくなくとも今日１日は動けず、ここＣ２’デポサイトで沈殿。
１０月２３日
昨晩夜中、伴のセキ、ノドの痛み、悪寒とまらず、抗生剤を飲んでテントに居る。ヴェロックスがきいた。
佐々木、兵頭、シェルパ３人で正面逆くの字左の雪壁をラッセルしながら登るが、下から３０％ぐらい登ったあたりで、トップの兵頭のすぐそばから長さ６０ｍ幅２０ｍの表層ナダレが発生、幸い誰も巻き込まれずにすんだが、ただちに登るのを止めてＣ２‘デポサイトまで下山した。この正面ルートは少なくともあと１週間ぐらい晴天が続いて雪が静まらないと手がつけられない。
１０月２４日　晴れ。
全員で、昨日の正面ルート基部から２００ｍ氷壁下の雪原を右上し、Ｃ２プラトーへ上がれそうな小山への雪稜ルートをトライする。雪稜ルートの下端やや上部に出た所で雪稜上部を見上げたが、雪稜右側の急斜面沿いにしかルートはとれず、この斜面も表層ナダレの危険性きわめて大きいことを観察するに及んで、そこからＣ２’デポサイトのテント場へ下山した。メンバーはもちろん、シェルパたちもＣ２プラトーへ上がる正面ルートと小山雪稜ルートのいずれも現在の積雪状態では表層ナダレの危険性大きいことで意見一致、今回はここまででこれ以上グルカルポ・リ頂上を目指すのを断念した。
１０月２５日　晴れ、夕刻より雲湧き出す。
兵頭はシェルパを連れてこの氷河最上部からのレンポ・ガン、ドルジェ・ラクパの写真をとりに行くも、氷河最上部はクレバス多くとても通過できず、フランス隊ランシサ・リＣ２あたりからの写真をとるにとどまる。佐々木も鼻、ノドの粘膜がやられセキが出る。兵頭は快調。
１０月２６日　晴れ。
Ｃ２’デポサイト　10：00→ＢＣ　18：00
昨夕の雲の出方からみて今日はてっきり雪かと思いきや、ピーカン。全員ＢＣまで下山する。途中で下からテンバが撤収ボッカのために上がってきた。降りとはいえヒマラヤで８時間超の行動はきつい。ＢＣは夜マイナス２度と暖かい。いっぺんに食欲回復。夜はいつも満天の星空。夜中小便６回。
１０月２７日～２８日　晴れ。
ろばが下から上がってくるのを待って２日間ＢＣで休養。
１０月２９日～１１月５日　曇り時々晴れ。
ＢＣ→キャンジン→ランタン→ラマホテル→シャルパガオン→シャブルベシ→カトマンズ帰着。
１１月６日　ＫＴＭ発。
１１月７日　成田へ伴／兵頭、関空へ佐々木帰国。

以上

グルカルポ・リ　登山を終えて

佐々木　惣四郎

２００７年のフランス隊の記録を見て、登るのはこの山だと感じて早速提案したのであるが、判断が少し甘すぎた様だ。山を正面からみて、とても美しく、登り易いと思ったのであるが、実際には４５７２ｍのベースキャンプに入って、荷揚げを始めたら、とても一筋縄では行かないと思った。

まずモレーン超えから始まったのであるが、ウンザリするほど長く、Ｃ１’デポサイトまで、丸々４時間の道のりである。アプローチとしては当然ではあるものの、予想に反しての長さには閉口した。下りは、少しは早いかと思ったが、やはり３時間半でほとんど変わらず。あせりは禁物だと言い聞かせて我慢、我慢で乗り切ったものの、何回もの往復は、とても我慢できないと、まず思ってしまった。

Ｃ１’デポサイトからの登りは、比較的雪が現われて、通常のルートになったものの、正面から見たのと違い奥が深い。つまり写真では深さが圧縮されて、短く感じるのである。

Ｃ２へのルートが始まった途端に、新雪に見舞われて、Ｃ２も Ｃ２’デポサイトとなって、新雪が落ち着くのを待つ事になった。このＣ１からＣ２’デポサイトも、ゆるい登りのプラトー状況であったが、これも最初の写真ではとても想像できなかった深さなのである。

Ｃ２’デポサイトは５５４４ｍで、周囲の風景も断然違ってきた。特に、ランタン氷河を挟んだ側の山は、モリモトピークを挟んで、シャルバチュウーム（６７０７ｍ）とキュンカ・リ（６５９９ｍ）があり、特に、キュンカ・リは美しい。グルカルポ側は、当初の写真の印象より、段々と大きくなる感じで、とても最初の印象とは思えない。すぐ横にドルジェラクパ（６９６６ｍ）西稜が雄大な姿を見せているが、肩を並べる難しさを感じさせられた。

Ｃ２’デポサイトからＣ２への高度差は３００ｍ余であるが、新雪をまとい危なっかしい氷壁となっていて、シェルパは雪崩が危ないとファイトロスしてしまった。まずＣ２が設営できないと、Ｃ２からの４００ｍの雪壁を越えてＣ３に入れず、Ｃ３から４００ｍのヒマラヤヒダからの登頂も全く実現しない。新雪の落ち着くのを待ったのであるが、何日も待つ事もできず、自分からＴＯＰをきって登る自信もなかった。結局　別のルートからのＣ２設営をもくろんだのであるが、ルートが長くなりすぎ、撤退の選択となってしまった。

撤退では、雪のついたモレーン越えで、７時間強もかかってしまい、暗闇のベースキャンプ着１８時となってしまい疲れた。

あとから思うにこの山は、やはり難しい山である。通常のクラシックルートがないのである。要はヒマラヤヒダを登らないと頂上に行けない山なのではないか？

小生にとっては、なかなか手に負えない難物であったにも拘わらず、１５日間での登頂を狙った事になる。これが今回最大の反省点になる様に思った。チャンスがあれば再度挑戦したいと思う。

聖者の白い山

兵頭　渉

モレーンで埋め尽くされた約１ｋｍ幅の氷河横断に２時間。標高差 100m を稼ぐのに２時間。100m 先の仲間との距離がなかなか詰まらない。C1 予定地の手前 4818m に隊荷（フィックスザイル、スノーバー、高所テント、高所食）、高所用個人装備をデポする。ドンチェで酒を断ち、ラマホテル（2502ｍ）で山さんの用意してくれたダイヤモックスを一日一錠飲み始め、高度順化を優先させたおかげか、体調はすこぶる良い。にもかかわらずこのスロースピード！、550hp の空気は確実に運動能力を低下させる。

連日の好天の下、C1 建設、Ｃ２’デポサイトへの荷揚げ、Ｃ２’デポサイト建設は順調に進んだが、一昼夜続いた降雪で上部キャンプへのルートを開拓できずに撤退を決意した。

グルカルポ・リ登頂のポイントは(1)高度順化、(2)天候、(3)上部 2 カ所の各々400ｍのヒマラヤ襞（雪氷壁）の登下行技術・装備とし計画、準備した。

(1)高度順化／SP02 は 10/9（2400m）～10/24（5544m）～10/28(4600m)期間を通して 82～99、頭痛・食欲減退・横臥時の息苦しさ・歩行時の息切れ無くすこぶる順調であった。ただ、入山から五日間下痢に悩まされた。カトマンズで食べた生野菜サラダの洗浄水に原因が有ったようだ。

(2)天候／モンスーン開けを狙って登山期間を設定したが、見事的中した。連日の好天に出来すぎ感があった。Ｃ２’デポサイトでのたった一昼夜の降雪で事態は一変した。4 日間の予備日では少なすぎる事を痛感した。ここヒマラヤでは日程的な登頂確率上げる為に 10 日間以上の予備日を設定する事が必須であろう。

(3)上部 2 カ所の各々400ｍのヒマラヤ襞（雪氷壁）の登下行技術・装備／今回は試すことが出来なかった。要素技術は国内の冬山で訓練できるが、高高度・長大さは体力、耐力、強い精神力が必要であろう。逆説的では有るがこれがヒマラヤ登山の醍醐味と私は思っている。

(4)その他－費用削減について／航空運賃はタイ　エアー＞エア　チャイナに替える事により半額（約 72､000 円）、キャラバン中はバッティ利用としコック・キッチン設備代を削減、海外山岳登山保険代理店（兵頭個人の事）の見直しで約 7 万円減、高所食のネパールでの調達、などにより個人負担が約 16 万円削減出来る。今後の山行は、やはり個人負担は 50 万円／一回が限度と思う。

(5) その他－突破力について／今回は荷揚げ、ルート工作など多くをシェルパに負わせた。トレッキングピーク以外の登山では先頭力･突破力の有る隊員を 2 名以上加えた隊編成で臨み登頂確率を上げるのが望ましいと強く感じました。

以上、雑感・反省・今後の展望である。

山頂を踏めなかったのは残念でなりませんが、初見の輝く山々、氷河の登下行、標高 5600m でのラッセル、大いに愉しみました。

山岳会の皆さん、ランタン・プロジェクトの皆さん
素晴らしいランタンの山々へ行きましょう。

衛星携帯電話の利用について

兵頭　渉

今回、THURAYA の SAT-PHONE＋携帯型 SOLAR パネルをレンタルしました。
メールは SMS と E-mail アドレスへ送信できると、説明書きに有り、E-mail は
２～３日おきにメールを送りましたが届かなかった様です。SMS は THURAYA 端末間しか送受信出来ない事が事前に判っていたので試しませんでした。

電話は電波状況があまりよくなく明瞭な通話は出来ませんでした。しかもキャンジンより奥に行くと衛星電波は受信しているのに衛星電話オペレーターが CHINA と表示され音声通話、音声問合せ等が一切使えなくなりました。以下は兵頭の推定です。根拠は私の GPS に搭載されている非常に大まかな地図での電話使用場所(国)と SAT-PHONE での衛星電話オペレータの表示が”CHINA”となるのがほぼ一致しています。私の GPS ではランシサカルカより奥、モリモト BC より東側は中国となっています。つまり国境線がネパール側に入り込んでいる。それ故、SAT-PHONE の電源をオンにし衛星電波を検索した際、THURAYA は SAT-PHONE の使用場所を SAT-PHONE に搭載した GPS 情報を元に割り出しその国の衛星電話オペレータにアカウントの照会をする。わが SAT-PHONE は NEPAL の衛星電話オペレータのアカウントを契約していたため無効と判断された。

ランタンプロジェクトの対象の大半はチベットとの国境線上にある為 THURAYA は使えないと判断します。

カラスの攻撃

兵頭　渉

今回 C1’デポサイト(4818m)、Ｃ２’デポサイト（5544m）テント側室に置いていた食料の一部がカラスの攻撃で損耗しました。

C1’デポサイト(4818m)では、ビニール紐製の袋（土嚢用の袋を想起されたい）３袋が食い破られビスケット 36 人食（3 人×12 回)、小倉一口羊羹 20 ヶ、ラーメン 10 袋、ポカリスエット粉末 10 袋が持ち去られてしまいました。

Ｃ２’デポサイト(5544m)ではテント側室に置いていたベーコン４袋、魚肉ソーセージ１０本、ウイダーインゼリー５袋、その他が側室の裾から進入して中から持ち去られてしまいました。

カラスはどの高度までついてくるか判りませんが、今後は 100 リッター程のプラスティックドラムに入れて荷揚げ、デポをすることが必要と思います。

日付	曜	内　　容	泊地高度	天　気
10月3日	月	関空11:45発-TG623-15:35バンコク		晴
		成田11:00発-TG641-15:30バンコク		
10月4日	火	バンコク10:15-TG319-12:25カトマンズ		晴
10月5日	水	カトマンズで準備(装備、食料チェック)		晴
10月6日	木	カトマンズ		晴
		パーミッション手続き（ダサインの為特別扱い）		
10月7日	金	カトマンズ　＝＞　ドンチェ（車５時間）	１９５０ｍ	晴
		シャブルベシ手前で路上落石の為、車通行止め		
10月8日	土	ドンチェ　＝＞　シャブルベシ	１４６１ｍ	晴
10月9日	日	シャブルベシ　＝＞　ラマホテル	２５０２ｍ	晴
10月10日	月	ラマホテル　＝＞　ランタン	３４３２ｍ	晴
10月11日	火	ランタン　＝＞　キャンジンゴンパ	３８６６ｍ	晴
10月12日	水	キャンジンゴンパ　＝＞　キャンジン・リ手前（４４００ｍ）	３８６６ｍ	晴
		高度順化ハイキング、登山準備		
10月13日	木	キャンジンゴンパ　＝＞　ランシサカルカ	４１０２ｍ	晴
10月14日	金	ランシサカルカ　＝＞　モリモトベースキャンプ。登山準備	４５７２ｍ	晴
10月15日	土	ベースキャンプ　＜＝＞　C1′デポサイト（４８１８ｍ）	４５７２ｍ	晴時々曇り
		ボッカ（歩荷）		
10月16日	日	ベースキャンプで休養	４５７２ｍ	晴
10月17日	月	ベースキャンプ-C1′デポサイト	４８１８ｍ	曇り
10月18日	火	C1′デポサイト　＝＞　C1	５３００ｍ	晴
10月19日	水	C1　＜＝＞　Ｃ２′デポサイト（５５４４ｍ）　へボッカ	５３００ｍ	晴
10月20日	木	C1　＝＞　C2′デポサイト	５５４４ｍ	晴、夕刻より雪
10月21日	金	C2′デポサイト沈殿、　降雪、視界不良	５５４４ｍ	終日雪
10月22日	土	C2′デポサイト沈殿、　雪が沈むのを待つ	５５４４ｍ	早暁雪止む、晴
10月23日	日	C2′デポサイト＞C2ルート工作、逆”く”の字正面ルンゼルート	５５４４ｍ	晴
		5600mで雪崩発生。本ルート放棄。		
10月24日	月	C2′デポサイト＞C2ルート工作、右リッジルート、リッジ乗越し	５５４４ｍ	晴
		5627mで雪崩リスク有り、本ルート放棄。		
10月25日	火	C2′デポサイト沈殿。ランシサ東稜末端雪原　5581m	５５４４ｍ	晴
		N28° 12′ 47.5″、E085° 44′ 19.6″へ偵察		
10月26日	水	C2′デポサイト　＝＞　モリモトBC	４５７２ｍ	晴時々雪のち曇り
10月27日	木	モリモトBC　沈殿　　荷下ろしドンキー待ち	４５７２ｍ	晴
10月28日	金	モリモトBC　沈殿　　荷下ろしドンキー待ち	４５７２ｍ	晴
10月29日	土	モリモトBC ＝＞　キャンジン	３８６６ｍ	晴
10月30日	日	キャンジン沈殿	３８６６ｍ	晴
10月31日	月	キャンジン　＜＝＞　リルンＢＣ（４３１６ｍ）　往復	３８６６ｍ	曇り
		墓参、メモリアルプレート確認		
11月1日	火	キャンジンゴンパ　＝＞　ラマホテル	２５０２ｍ	曇り
11月2日	水	ラマホテル　＝＞　シャブルベシ	１４６１ｍ	曇り
		シャルパゴン経由		
11月3日	木	シャブルベシ　＝＞　カトマンズ　（車6時間）		曇り時々晴
11月4日	金	カトマンズ		曇り時々晴
11月5日	土	カトマンズ　パーミッション預け金チェックアウト		曇り時々晴
11月6日	日	13:50カトマンズ　TG３２０－18:25		晴
		バンコク23:30-TG622,23:50-TG642		
11月7日	月	7:00関空,8:10成田		晴

アンナプルナ・トレッキング

福山　昇二

期　間　：２０１１年4月27日～5月11日
メンバー　：福山、他２名

4月27日(水) 晴れ

関空0:30～4:20バンコック10:15～(時差－1:15)～12:25カトマンズ。

空港でビザ手続き。15日以内の滞在で手数料は25ドル。ガイドは今回のトレッキング・エージェント(セブン・サミット社)の社長の親戚にあたるバサン。同じ村の出身で日本にここ数年、出稼ぎにきているらしく日本語が話せる。

4月28日(木) 晴れ　午後夕立

ホテル発6:30～カトマンズ国内空港発8:30～9:15ポカラ空港～ホテル。

空路ポカラへ。機内からマナスル、アンナプルナ山群が見えた。ホテルはイエティー・ホテル。昼食後、世界登山博物館を見学。湖の畔を散策。

4月29日(金) 晴れ　午後から雨、夜半かなりの雨。

出発7:30～車～9:00ナヤプル～11:10昼食12:30～14:10ティケデュンガ。

ナヤプルまではタクシー。ここからしばらく自動車道を歩く。このコースは人気トレッキング・コースで多くのトレッカーが歩く。道は快適でロッジもにぎやかであった。3人部屋で共同の温水シャワーもある。

4月30日(土) 小雨のち曇り

出発7:30～11:40(昼食)12:30～14:15ゴレパニ(Ghorepani 2,874m)。

ゴレパニ峠に向けて登りが続く。ゴレパニはダウラギリ、アンナプルナの展望台プーン・ヒルに近い村で多くのロッジがある。我々は一番上にあるきれいなロッジに泊まる(3人部屋)。

5月1日(日)晴れ 昼前に大雨。

出発4:35～5:15プーン・ヒル頂上(3,210m)6:10～6:40ロッジ着・朝食7:30
～11:45タダパニ(Tadapani 2,721m 昼食、宿泊)

4時に起床し、お茶を飲み出発。ランプを着けて頂上をめざす。ゴレパニに宿泊している人は皆、夜明けのプーン・ヒルが目当てであるから行列である。

夜明け前に到着し、日の出を待つ。少し寒い。間もなく、左からダウラギリ、トゥクチェ、ニルギリ、アンナプルナ南峰、アンナプルナ主峰、マチャプチャレの山々が展開する。ロッジに帰り、展望を楽しみながら朝食。

ゴレパニから尾根道をタダパニへ。到着前に雨が降ってきて、到着時には大雨となる。霰(アラレ)、雹(ヒョウ)らしき物も混じっている。結局、今日はここまでとする。

5月2日(月) 晴れ　午後から雨

出発6:50～10:50チョムロン(Chomrong 1,951m 昼食)11:50～14:25シヌワ
(Sinuwa 2,340m)

タダパニからどんどん下り、アンナプルナ BC へのルートとなるチョムロンへ。ここから長い石段を一気に下り、チョムロン川を渡る。今度は急な斜面を登りロッジが 2 軒あるシヌワに着いた。またまた雨が降り出し今日はここまでとする。このロッジの食堂にあるテレビでアルカイダのビンラーデンが殺害されたとのニュースが流れていた。

5 月 3 日(火) 晴れ　夕方から雨。

出発 6:55～11:15 ヒマラヤホテル(Himalaya Hotel 2,900m 昼食)12:15～16:00 マチャプチャレ BC(Machapuchhre 3,720m)

このあたりまで来るとアンナプルナの山々が見え出す。だんだん道は岩壁に囲まれたモディ・コーラ(谷)沿いの道となり、高度を上げる。MBC のロッジは最上部にある最近建ったりっぱなロッジであった。今日は長時間、歩いた。ここまで来ると少し寒い。

5 月 4 日(水)　晴れ

出発 8:00～9:55 アンナプルナ BC(4,130m)

今日は最終目的地のアンナプルナ BC まで。谷は開け、ゆるい登りとなり残雪もでてくる。アンナプルナ BC は 360 度の展望。さっそく近くのチョルテンのある小丘まで行き写真を撮る。左からアンナプルナ・サウス(南峰)、アンナプルナ主峰、テントピーク、アンナプルナⅢ峰、ガンダルバチュリ、そして右端にマチャプチャレ。明日の夜明けが楽しみである。

5 月 5 日(木) 晴れのち曇りのち雨　5 時、気温 1 度 C(室内)。

出発 7:35～11:20 ヒマラヤホテル(昼食)12:15～14:20 バンブー(2,335m)

5 時半頃、朝日に映えるアンナプルナ山群を期待して小丘に登るが山々はガスっており、はっきり見えない。期待外れであった。はっきり見えるのはアンナプルナサウスぐらいであった。ロッジにもどり朝食。別天地から去るのはなごりおしい気がする。

もと来た道をどんどん下り、バンブーで宿泊。2,000m 近く下って来た。

5 月 6 日(金) 晴れ　午後から雨。

出発 7:30～10:55 チョムロン(昼食)11:55～12:50 ジヌー(Jhinu)

シヌワを過ぎ、チョムロン川まで下り、長い長いチョムロンまでの石段の登りが待っていた。今日の泊まりはガイドのパサンがお勧めのジヌー。直ぐ近くの川原に温泉があるという。到着後、早速温泉へ。20 分、登り 25 分。川原にある露天風呂は適温で 3 槽あり、数人の人が入っていた。快適であった。

5 月 7 日(土) 晴れ

出発 7:30～11:20 シャウリバザール(昼食)12:50 ～車道～13:55 ビレタンティー 14:05～ナヤプル 14:30 ～車～16:00 ポカラ。

モディーコーラ沿いに村々の道をぬってシャウリバザールへ。ここから整備中の車道を歩く。プーン・ヒルへの分岐点となるモディ・コーラに架かる橋を渡るとビレタンティー。

5 月 8 日（日） ポカラ 7:35～空港発 8:35～9:00 カトマンズ。

今回のトレッキングはロッジ泊まりで荷物は少なく、人気のあるコースで道も整備され、高度も低いので快適であった。やはり BC からの 8,000m の眺めはすばらしいものであった。

費用は航空運賃が 11 万、カトマンズからカトマンズまでのトレッキング費用（ポカラ往復の航空運賃、ポカラでの滞在費、ガイド、ポーターの費用、トレッキング時の費用（3 食、宿泊））としてのエージェント支払いが 900 米ドル、トレッキング中のビール代（高度が上がるほど高くなる、最高は缶ビールが 370 ルピー）、カトマンズでの滞在費、ビザ代、ガイドのチップ等が約 3 万。合計一人 21 万程であった。

プーンヒルからのダウラギリ主峰

ダウラギリとニルギニ連峰

BC からアンナプルナ主峰

アンナプルナ・サウスをバックに

シュレックホルンと震災と

山田　裕敏

１０年ほど前に小笹さん、佐々木さん達とグリンデルワルトのテント場を基地に夏の休日を楽しんだことがある。その折にアイガーのミッテルレギ小屋から見た、氷河を一つ挟んで東側に聳えるシュレックホルンの印象は永く記憶に残り、いつかこの山にとの思いを抱いていた。その山を下りてから、辻村伊助の「スウイス日記」の存在を始めて知り、読み耽った。時既に５０歳代も後半になっており、何ともおくての事であった。この本は数々の新しい事を教えてくれた。スイス・アルプスは槙さんから、でなくて、その 7 年も前の 1914 年 1 月に伊助は軽々とユングフラウに登っている。その夏、彼と近藤茂吉はシュレックホルンへ向うのだが、6 月末にサラエボ事件が勃発し、7 月 28 日にオーストリアはセルビアに宣戦布告をしている。8 月 1 日に彼らはシュレックホルン小屋を 2 時に出発、11 時半頂上に到達し休憩の後下山開始間もなくしてガイド 2 名と 4 名全員雪崩に足を掬われ千ｍほど墜落し、重傷を負う。欧州大戦まなかのインターラーケンの病院入院中に得たスイス人の妻とその後箱根湯元にて高山植物の栽培に勤しむ伊助一家を関東大震災の山津波が襲い、伊助夫妻・息子達計 4 名が土砂に埋まり遺骸も出てこないという。1923 年 9 月 1 日のことであった。

今年 3 月の東北大震災のあと、落ち着かない日々を送るうちに、この震災の年にふさわしい山登りは上記のような経緯からシュレックホルンである、と結論付け、夏に向ってトレーニングを始めた。同行の士を募るも応ずる者無く、それではと、一人で出かける事とする。8 月 8 日、チューリッヒ空港着。地中に電車が走る大きな空港に様変わりしている。グリンデルワルト界隈は前どおりの賑わい。テント場も変りは無い。翌日、雨の中を駅に近いスポーツセンターの中にある山岳ガイド紹介所に行き、ガイドを頼む。窓口の女性は、シュレックホルンはアルプスの一般ルートの中では難易度が一番で、小生はそれに適わないと撥ね付けてくる。こちらの山歴を述べるもそれは何年前の事だ、とか言い少し梃子摺る。ヒマラヤ登山歴まで持ち出すも、シュレックホルンは岩登りの山なので、それに近い登り方をするウェッターホルンに先ず登り、それでＯＫならシュレックへ向かえ、などと言い出す。二つの山のガイド料を負担する予算は無く、シュレックホルンに登るのが私の人生の大きな目標の一つなのだ、途中で無理なら下山することは自己責任であり、ガイド組合に迷惑を掛けるつもりは無い、などと抗弁し、やっと彼女の予定表に書き込ませる。彼らのガイド料金表に依るとこの山は確かにミッテルレギやマッターホルンよりも百スイス・フラン高い。

翌々日、携帯に電話が入り 12 日 17 時にシュレックホルン小屋でガイドの Dave と落ち合うように、との案内を受ける。今年の 8 月初旬までは天気が悪く、小屋はガラガラだった由だが、この所好天が続き、満員状態である。Dave はフランス系の人間で、30 歳前後、引き締まった体躯を持ち、話しやすい雰囲気。満月を見て床に就く。翌朝 2 時半出発。舗装道路状の氷河道をだらだら登り、間もなく左折し暫く上がると雪面に出てアンザイレン。アイゼンを履き更に進み、クレバスを渡れば岩場に出る。ここからは略 3 級程度の岩登りが十数ピッチ続く。

３０ｍほど毎に確りしたボルト・リングが埋め込まれており、各パーティが略二組ばかり同一斜面に取り付き目まぐるしく動いている。初めはそれらにペースを合わせていたが３５００ｍ辺りからは息が続かず、ドンドン抜かれてゆく。それでもガイドレスの遅い組

もあり、Dave はこれを追い抜くに一般ルートを離れた難易度の高いコースをするすると登り、小生に後につけと急き立てる。そのルートを少し登るが、逆層でハーケン等の手懸りも無く、進退窮まり宙吊で下ろして貰う。時間を掛けて呼吸を整えていると、後 2 分後に動き出さないなら下山する、と厳しい言葉を掛けてくる。已む無く進む。10 時頃頂上着。4,078mと、さして高くは無いが氷河から屹立している山容なので、足元の景色はなかなか他では見られない高度差が感じられる。軽量化のためカメラを持たずに来たので、彼に一枚撮ってもらい、下山に入る。伊助の遭難は 97 年前のことで、一体この道の何処に雪崩を起すような雪量があったのだろうと思わせる。兎も角全て岩場を伝うか、ザイルにすがって降るのみである。当初は Abseilen で降るのかと思っていたが、そうではなくてガイドが私の安全ベルトにつけたザイルを徐々に繰り出し、ずり下ろしてくれる、というスタイル。これだと私の不注意で墜落する惧れは全く無い。それはそうだが、余り快適なものではない。雪面に降り立ち下り道を辿るが、疲労度が強く、次々と追い抜かれしんがりを歩く。此処ではガイドは文句を言わずに歩調を合わせてくれる。17 時ごろ小屋に辿り着き、ガイドと別れてもう一泊する。確か 10 年ほど前の佐々木さんは 17 時前にはテントに帰着しており、彼の足は 4 時間程速かったことになる。翌日も快晴で、アイガー東山稜の長い尾根をグリンデルワルトとは反対側から楽しみ、シュレックホルンやウェッターホルンの岩場の光景を何度も仰ぎ見た。

帰国後 JAC の「山岳」を駒ヶ根の山荘で何冊も拾い読みしていた所、田口二郎の評伝に出会った。旧制甲南高校や東大で錚々たる山仲間達と日本の岩場で初登攀記録を競い、また滝谷の岩尾根の命名で名を挙げていた彼は、1937 年ベルリンで発病し、療養後 1938 年シュレックホルン北東壁を兄の一郎とで初登攀している。その後東大の山仲間高木正孝と兄を加え、欧州アルプスを舞台に、憑かれたような山への挑戦を始める。1939 年 9 月 3 日に欧州大戦が始まり、ベルリン日本大使館の嘱託となる。1942 年笠信太郎とベルリンで会い、朝日新聞のチューリッヒ事務所を開きその地に駐在する。1944 年ドイツから笠、高木もスイスに入る。日本敗戦直前に高木と共にウェッターホルン北壁にルートを開く。スイス女性エルナとの交際があった。敗戦国民として足止めされていたが、スエーデン政府の庇護の下、1947 年 12 月にジェノヴァを発ち地中海からパナマを通過、SF/Manila/香港を経由し 1948 年 2 月帰国、1949 年 5 月エルナ来日、結婚と波乱に満ちた彼の前半生を知ることが出来た（以上村山雅美氏の文章に依る）。伊助が東大卒であったことも含め、なにやら似通った所のある人生の前半生を二人は生きているように見受けられる。然しながら、田口は雪崩にも地震にも合わず、戦後もマナスルの偵察行、第一次隊隊員として高木と共に活躍を続ける。神戸大学教授（山岳部長）となった高木はスイス・ガイド資格を持つほどのつわものであったが、1962 年に南太平洋で命を失った。一方田口は天寿を全うした。

辻村伊助に関しては、中里恒子の著作「忘我の記」（1987 年初版発行）がある。伊助の「スウイス日記」には記されていないローザとの交際の展開や近藤茂吉、遭難時のガイドたちのこと、伊助の植物学者・高山植物栽培者としての生き方、父母・兄他当時の家族とその家計などに就いてきめ細かく触れた作家の叙述が楽しめた。

大正初年の上高地はもう俗化してしまった、と嘆く伊助の感受性の強さを思うと共に、彼をしてそう言わしめた自然が残っていた明治期の「神河内」とはどんなだったかに思いを馳せつつ、関東大震災で無くなった彼とそのご一家のご冥福を祈りたい。

ドロミテ、サンモリッツ（エンガデン）トレッキング

（2011 年 7 月 20 日～8 月 4 日）　　上田　忠士

イタリア北部ドロミテ、スイスのサンモリッツに家内と出かけた。二週間の山旅であったが南チロルの雰囲気を感じ取ることが出来た。

ベニスに午前に到着、観光してその日駅近くのホテルに泊り、翌 7 月 22 日一日に一便のバスでドロミテの東の中心コルチナダンペッソへ向かう。垂直に切り立った石灰質の岩峰、その異様な光景をこの目で見るのが目的である。ホテルにチェックイン後 faloria 山へロープウエイで上がり、コルチナを一望し周辺の地形を知る。まさにドロミテ山塊に囲まれた町である。Tondi まで登るとトファナ、トレ・チメもよく見えた。

翌 23 日天気はあまりよくなかったが 8 時 50 分のバスで Passo Giau へ向かう。ここは標高 2236 m。寒い。ここからトレッキング開始。2party が先行している。1 時間半ぐらい歩き雨具を着用する。起伏の少ない登山道が続き、アルペンローゼやエーデルヴァイスの花が咲いている。天気がよければ景色、高山花をもっと楽しめたことだろう。小雨の中を 湖畔の小屋に着くと多くのトレッカーが休憩しており我々もここでランチ。雨もあがり Kampo に向かって下る。今日は 5 時間半の歩きであった。

25 日　昨日はトレッキングを予定したが降雪があり、トレ・チメ行きバスは不通。変更してミズリーナ湖を散策したが、今日は大丈夫だ。バス終点の Auronzo 小屋（2330m）で下車。周辺は 20ｃｍぐらいの積雪。この時期雪景色は珍しいようである。多数のトレッカーと共に歩き始める。ここはドロミテを代表するコースであり高低差もなくラクな歩きだ。30 分も歩くとラバレード小屋だ。ここから少し登って、目的のロッカテリア小屋までは雪道。スリップに注意しながら歩く。三つの岩峰（Tre cime）を真近くに見るが迫力満点だ。ロッカテリア小屋でランチ。トレ・チメを一周したかったが、北面の雪とバスの発車時刻を心配して往路を引き返す。コルチナへ帰り、ホテルで荷物を整理して 16：25 のバスでコルバラに向かった。

26 日コルバラは山に囲まれた小さな町だ。ゆっくり数日は滞在したいところ。早朝 7 時に朝食を用意してもらい、主な荷物をデポして出発。天気は良さそうだ。バス発 8：15　Gardena 峠で下車、6，7 人と共に歩き始める。ここは標高 2121m。Gimmy 小屋を経て、ルート 8 号を取り、右にセラ山塊、眼下に緑の草原、左頭上に Ciampac の岩峰を見ながらの下りのコースである。セラ山塊は雄大な山並みで一度は歩いてみたいところだ。ホテルに戻りパックして 16：30 発のバスで Bolzano に向かう。オルテセイでバスを乗り換えして Bolzano のＹＨ着 19：30。4 人用の部屋でアメリカ人 2 人と同室であった。

27 日　今日はバスツアーに参加して高原台地 Alpe di Siusi に行く。Siusi のゴンドラ乗り場前でバスを降り三々五々に行動する。ゴンドラでコンパスまで上る。天気はいい。サルトリアまで広い草原の中を歩くと前方にサッソルンゴ（3181m）、セラ山塊が聳える。１時間半の気持ちの良い歩きだ。リフトで 2100mのウィリアムヒュッテまで上りドロミテの最高峰マルモラーダを眺望する。Bolzano に帰り YH に到着したのは帰着４時半だった。今夜の同室はスペイン人夫婦。　1 日のバスツアー28 ユーロは安い。翌日は好天の中ＹＨ近くのゴンドラで約 1000m上って Ober　Bozen へ。チンチン電車に乗り Collolbo へ行き、ここから Fenn Weg 周回道を歩く。遠くにドロミテの最高峰マルモラーダ、その右に Burgstoll など 2500mクラスの秀麗な山々の姿があり、心癒される道である。帰途はルート

35 を辿って Ober Bozen まで約 6ｋｍを歩く。１時間半。さらに頑張って Bolzano まで眼下に街を見ながら下る。６時間余の楽しいハイキングであった。夜はドイツ人親（母）子と同室であった。

29 日　サンモリッツへ移動。コースはイタリア、スイス国境を通過する田舎コースである。列車、バスを何回も乗り継いでサンモリッツ着午後 2 時。お陰で車窓の風景を楽しめた。早速今回の旅行の目的のひとつであったセガンチーニ美術館まで歩く。Segantini の代表三部作を観賞。やはり実物を目前にして感動する。湖畔を歩き YH 到着５時。部屋は個室で広く新しくツインベッド。トイレ、シャワー付き。夕食のサービスもあり YH とは思えぬぐらいである。１人２食付約 9000 円。

サンモリッツはスイスの Engadin 地方にあるが、氷河に囲まれたベルニナ山塊に近く、美しい谷、湖があり風光明媚で手ごろなトレッキングコースも多い。我々は三泊して Rozeg 谷と Fex 谷を歩いた。

Rozeg 谷トレッキングはスールレイの Corvatsch から ロープウエイで Corvatsch 展望台へ。ここは標高 3303m。中間駅ムルテルまで下り、トレッキング開始。先行 party ３組あり。峠のフォルクラスールレイまでは 30 分、ここまで来ると広大な Rozeg 氷河、Tschierva 氷河が目に飛び込んでくる。フォルクラの分岐を左折、右下に Rozeg 谷を見ながら下る。谷は広く明るい。谷を下りたところにある Rozeg 小屋到着。ここの川原でランチ。トレッカーの姿が散見される。 ここから Rozeg 谷に沿って歩くこと１時間半で Pontresina 到着２時半。 休憩の後 Alp di Plaz を経てＹＨまで歩く。誰にも会わない静かな歩きであった。ＹＨ着５時。今日は６時間半の歩きであり、家内もよく頑張った。夕食はワインとパスタ、ここの食事はおいしい。

翌 31 日は Chuern 峰（2689m）登山と Fex 谷トレッキングのトレッキングだ。朝食 7：00。一番乗りである。バスでシリス・マリアに行く。バス代 7.8 スイスフラン。Furtschellas のロープウエイで展望台へ上る。ここがトレッキングスタート地点。天気はよく気持ちの緩やかな登り道である。まず Piz Chuern（2689m）に向かったが我々は谷沿いの道でなく左手の高い道を選ぶ。約 500mの登りだ。この道は標識もあるが、いわゆる一般道ではなく、やや険しかった。誰にも会わず小さな頂きに着くと大きな湖、目指す Piz Chuern が遠望された。美しい湖畔を歩き Chuern に到着。ここでランチ。眼下に森と緑の牧場、シルス湖と飽きることはない。下りは Fex 谷を左下に見て、実に雄大な光景を楽しむ。シルス・マリア着３時。1000mの下りであった。バスでサンモリッツドルフへ行き、明日のミラノ行きの切符を買う。一人 38 スイスフランと安い。

８月１日　ベルニナ急行で Tirano,　Milano へ

ＹＨをチュックアウトして 7：45 出発。サンモリッツ駅まで湖畔を 30 分歩く。気持ちのよい歩きだ。駅には 20 人ぐらいの日本人ツアー客も来ており、彼らもベルニナ急行に乗車した。赤い列車は 8：45 出発。車窓からは森や山の美しい景色が広がり、モルテラッチ氷河の全容が見える。我々は分水嶺駅、オスピッツベルニナ（2253m）で下車。ここはビアンコ湖畔で列車一区間（約 5ｋｍ）のトレッキングスタート地点だ。3,4 組に遅れて出発。ドイツのグループと湖畔をしばらく歩き、放牧地、山道を歩き１時間半でアルプ・Grum 駅に到着。ここは断崖絶壁の上にある小さな駅。パリュー氷河を眺めながらビールを飲み休憩する。Alp Grum 駅からは急勾配を電車は下りイタリアに向かう。オープンループ橋を通過して Tirano　駅到着 14：20。ここは国境の駅。イタリアに戻ってきたのだ。市内を１時間ぐらいブラブラして次ぎの列車を待つ。国境通過はフリーであった。イタリア側の駅から乗車。ミラノへはコモ湖畔を走る。湖、緑の山、点在する住宅が美しい。ミラノ到着 17：40。駅近くのホテルに落ち着く。

ミラノに２泊して日本に向かった。　　完

創立９０周年祝賀会開催報告

１２月２日（金）午後６時から大阪弥生会館にて、当会創立９０周年祝賀会が開催されました。池永元会長、馬野・荻野氏、宗實女史など８０歳代の方々を始めとし会員、賛助会員、ご来賓の方々合計６０人ほどにお集まり頂き、賑やかなひと時を持つことが出来ました。

先ず、亡くなられた会員の方々に対する黙祷から始まり、廣谷会長挨拶のあと、ご来賓からは日大 OB で日山協会長神埼忠男氏より４０年ほど前の JAC エヴェレスト隊の事や同氏のその後のエヴェレスト他の登山の思い出、現在の日本山岳協会での活動状況、とりわけオリンピック開催地と山岳競技の組込との関係などリアルでホットなお話がありました。即ち、ロンドン・リオの次がローマであれば、山岳競技がオリンピック種目に入る可能性がある。東京では無理。これは新しい競技種目としてゴルフやラグビーよりも山岳競技が世界的にポピュラーなことや、ローマであれば競技会会場にふさわしい場が手近にあるからとの事でした。そして、国内山岳界でもいまや山岳競技と云えばボルダーリングであり、山岳団体の伸び代はそちらの方向にあるという大変示唆に富んだお話でした。次いで同志社 OB の平林克敏氏からは、1960 年のアピ隊遠征の折、森本さんからギャルツエンへ翌年市大隊へのサーダ就任の要請の言付け依頼のことや、四光峰登山許可取得時に果された役割など当会と関連のある同氏の広く深いご経験の一端の御披露がありました。川勝前会長のプロローグの後、池永名誉顧問に乾杯のご発声を頂き、歓談に移りました。

途中で伴さんから秋のグルカルポリ峰遠征の報告、兵頭さんから映像紹介があり、成功例の四光峰の映像がこれに続きました。午後９時となり、逍遥歌のあと万歳三唱を想定しましたが、澤井さんによる一本締めで幕が閉まりました。

記念誌に就きましては編集作業に手間取っておりまして、祝賀会ご出席の方々からは当日代金３千円を頂き誠に恐縮ですが、年明け後に必ずお届けいたします。暫くご猶予下さい。ご欠席の方々にもご購入頂きたく、別途ご連絡しますので宜しくお願い申し上げます。

尚、欠席された方々からの祝賀会へのメッセージを次に紹介します。一部私信もありますが、公開させてもらいます。ご容赦下さい。　　（以上　記　山田）

「冠省　原稿の件など色々とご配慮ありがとうございます。１２月２日の祝賀会にぜひ参加をとの温かいE/メール頂きましたがまだ国際金融状況が落つかぬまま日米その他での応接発表に追われ只今もニューヨーク滞在中なのですが、１２月２日の帰国、一旦は飛行機予約したのですが今日現在とても当地を離れる事が出来かね残念ながら欠席させて頂きたくよろしくお願い申上げます。日経新聞の私の履歴書に今月元野村證券ＮＹ会長の寺沢さんが書いておられる野村徳七さんは野村證券と大和銀行の創始者であらせられますが商大（市大）の大先輩であり大学図書館に野村徳七文庫のあったこと皆さまご存知のことと存じます。野村はあと奥村、瀬川の名リーダーにより大発展されましたがお二人とも商大（市大）の先輩であられます。私は野村に行けと金融論セミナーの一谷先生に言われたのに当時は日本一であった山一に入りました次第でしたが、今後ともよろしく。　内藤　毅　ＰＳ　池永先輩、廣谷会長、馬野、信濃、高木、山本各氏服部さん島田さんそして橋本ご夫妻にもよろしくご風声賜れば幸甚でございます。2011.11.14 ＮＹより　　以上

「当日はまだ仕事がありますので。益々の御活躍を祈念しております」山北與士雄・克子

「療養中のため欠席させて頂きます。ご盛会を祈念します。」門田嘉弘、　同　林　日出雄

「連綿として90年の歴史を刻むOCUACの岳人各位のその時々のご活躍に大いなる敬意を表します。小生は自己表現の一つとして「登山」を選びFresh & Uniqueをベースに未知の探求を楽しみました。国内は笠ケ岳に始まり笠ケ岳に終り、ヒマラヤはランタンリルンに始まりランタンリルンに終る1960～1978年の活動でした。その間、ウルキンマン、カンジロバ初登頂が出来たのは好運でした。メンバーのうち清原氏、佐藤、諏訪、後藤が早逝。後藤が生きておればヒマラヤ8000m峰遠征を実現させたかった、と思った時もありました。今尚、年令を越えて活動されている諸兄にはうらやましい限り。ご無事を祈るばかりです。多謝。」　　常慶和久

「現在バンコクに駐在しています。だだラオスやナコンラチャシマーの方に試験地があるので出張ばかりでバンコクにはあまり居ません。祝賀会には行きたいのですがいまだ未定ですので一応欠席扱いにして置いてください。（その後洪水騒ぎもあり欠席）　下田勝久

「福山様　あたたかいおさそいありがとうございます。皆様の元気な顔を見たいとは思うのですが、仕事の都合上あきらめます。山岳会のご発展を期して。」　　西沢裕子

「こんにちは、いつぞやは大変お世話になりました。最近も登山は全くせず、平日週５でボルダージムへ、休日はどこかの岩場へ。クライミングばっかりやっています。藤井陽介

「９０周年おめでとうございます。ご案内をいただきましたが、当日先約があり出席できません。大阪市立大学山岳会のますますの発展をお祈り申し上げます。」　　重廣恒夫

四光峰関係来賓　毎日新聞　榊原雅晴氏　MBS元報道局長　辻　一郎両氏がご出席されました。

日山協会長神埼忠男氏

同志社OBの平林克敏氏

書籍の寄贈について

奥田　寛

（１）小林　深氏（昭和３５年卒）より、「定年悠々」（自著）の寄贈を受けました。

・「定年悠々」は、定年後の“小林　深氏の生活と意見”が９つの章立てで多岐に亘って書かれた随想です[PHP パブリッシング社。２０１１年５月１０日刊]。

・日々の暮らしと時折の登山や山岳写真行などを題材に、的確な観察による考察がコンパクトに著述されており、特に私は『雑事は湧いてくる』・『閉塞感』・『山路』・『写真入門』に惹かれ、繰り返し読んでしまいました。

＜付記＞

出版を祝賀して、「珍しい肴で飲む会」が、金沢から来阪の小林さんを囲んで９月２５日夕、１５名の出席者により催されました（於：ガンコ梅田 OS 店）。盛会だった由。

＊ご寄贈頂いた書籍は、「ヒュッテ雪線」の１階書棚（上から三段目の棚）に蔵置しました。

（２）武部　秀夫氏（昭和５３年卒）より、「遠き頂　ランシサ　リ　６４２７M」（岡山県山岳連盟ランタンヒマラヤ登山隊２０１０報告書）の寄贈を受けました。

＊ご寄贈頂いた書籍は、来春、「ヒュッテ雪線」の２階奥の書棚に蔵置予定です。

（３）故・佐藤一良氏（昭和４２年卒）の夫人より、遺された書籍の一部を「ヒュッテ雪線」蔵置向けに寄贈して頂きました（全５３冊）。

＜寄贈書籍の概要＞

―「関西学生山岳連盟第１５号」、「関西学生山岳連盟 OB 会・報告 No.２」
「AAVK－OB 会　ゲント峰登山計画書１９７８」、「山岳　９５年」

―「梅里雪山事故調査報告書」、「AACK 時報　No.１３（梅里雪山峰１９９６）」
「KUNYANG・KISH１９８７」、「ナンガパルバート１９８６」

―「岳」（昭１８）、「剣の窓」（山崎安治）、「山の詩帖」（尾崎喜八）
「黒部渓谷」＆「続・黒部渓谷」（冠松次郎）、「世界山岳全集」（第１０巻）
「世界山岳名著全集」（第１巻～第１１巻＆別巻。ただし、第８巻は欠）
「ヒマラヤの高峰　別巻　写真集」（雪華社）、「白いクモ」（H・ハラ―）
「雪と岩」（ガストン・レビュファ）、「岳人講座　①冬山」「同左　②春山」

―「上高地」（昭５）、「THE　MOUNTAIN　WORLD　１９６０－/６１」
「世界の山々　Ⅱ」（三田幸夫編）、「深田久弥　山の文学全集　ＸⅡ」
「今西錦司全集　第一巻」、「雲の中のチベット」（薬師義美）他

＊ご寄贈頂いた書籍は、「ヒュッテ雪線」の２階書棚に蔵置しました。

アイスランド紀行

白夜と火山と氷河と・・・

佐々木　惣四郎

ワイフと２人でアイスランドをバスで移動しながら一周する旅にでました。いわゆるトレック旅行ですが特徴は１ヶ月の行程をすべてテントでやった事で、この為に自然と深く接する事ができました。バス移動しながら現地ツアーに参加し、内陸部（ハイランド）中心に周ってきました。

アイスランドは、火山の国を実感。特に、ヘクラ火山の登山（１４９０m）、アスキア山への旅では、余りにもスケールの桁外れに広く、大きい溶岩台地が延々と続き、異常ながら美しい山形、息をのむ美しいカルデラ湖には、異次元の体験をさせられました。アメリカの宇宙飛行士が、月面探査のトレーニングにも使われたとの事です。

山の高さは、１０００m前後が中心ながら、山には木が全くない丸裸で、ほとんどが火山の跡をとどめ、多く残る雪と大氷河からの雪と共に、残雪期の美しい山並みを形成し、心癒される風景となっています。地球創生期の溶岩溢れる大地といったところも多々あり、大荒野の単純な美しさともいえます。

また南アイスランドのソールスモルク及びランドマンナロイガルは、トレックにうってつけの場所といえるでしょう。火山風土は、３０００年前ぐらいの間に形作られた様ですが、地球の激しい息吹が、感じられ、全く想像を超えています。

北緯６６度に位置する為、１０００m弱で大氷河が存在しており、余りにも広大で氷河というより氷冠（ＩＣＥ　ＣＡＰ）といった方が適切で、ラング氷河とヴアトナ氷河にて、それぞれ雪上車、大型ランドクルーザーでの闊歩　氷河ウオーキングをやってきましたが、広大な雪大地は、グリーンランドあるいは極地そっくりで、多くの氷河湖もあり、ヨークルスアウルロウンには、極地なみの数１０００年前の氷河が流れこんで極地風景をなしています。

また高緯度の為、白夜となっており、１２時でも２時でも３時でも明るく、ヘッドランプが全く不要であり、テント生活ではアイマスクが欠かせませんでした。

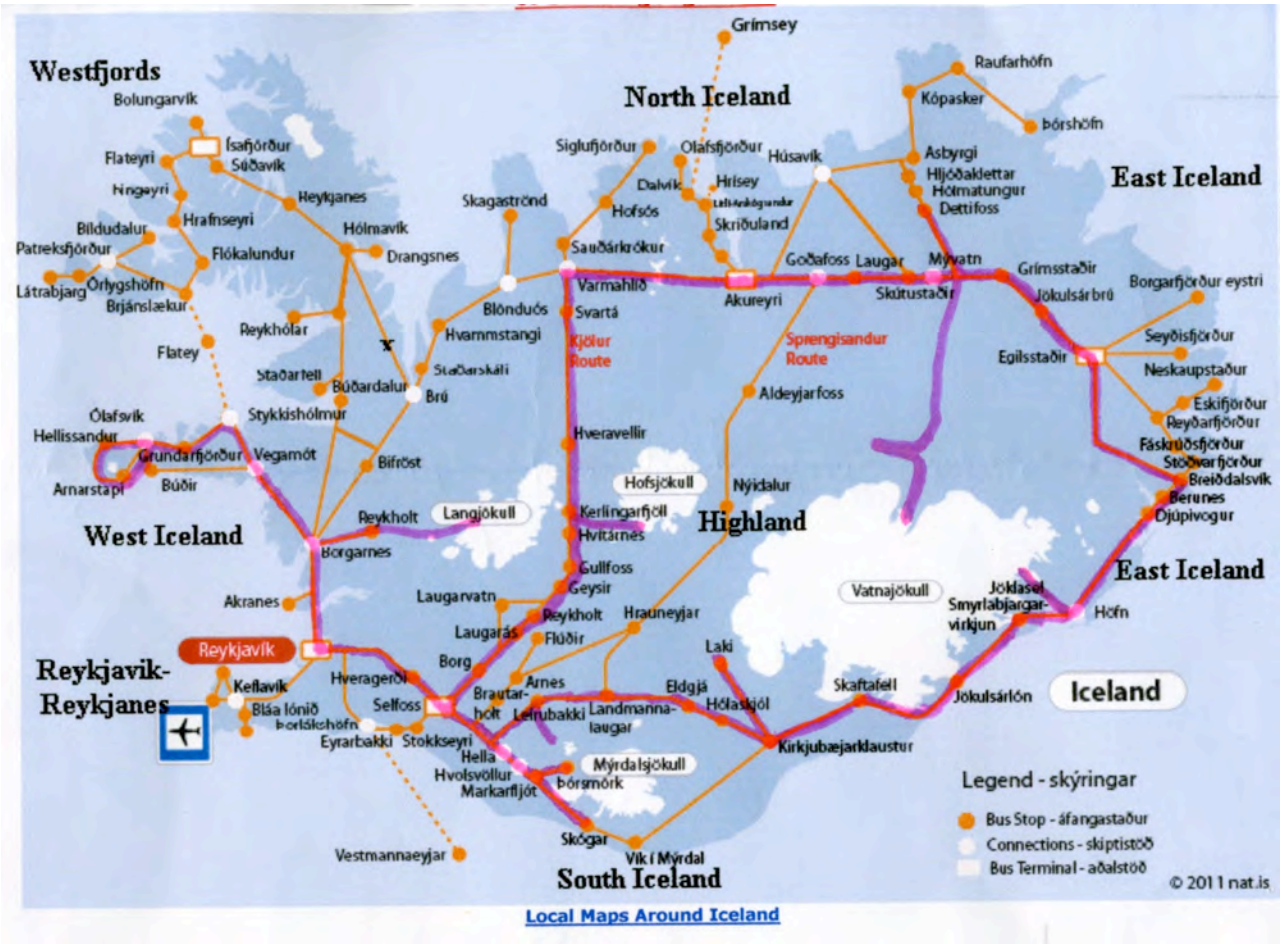
大氷河の雪解けにより、多量の水が流れ出し　グルフォス、ファーグリフォス、デテイフォス等々豪快な滝が見られ、派生した虹と共に豪快な風景を形作っています。イグアス、ナイアガラにも匹敵するといって良いと思います。これらの滝は、山から落ちているのでなく大平原の谷に忽然と現われてあり、日本人の感覚から、異質な感じがする滝の出現でした。

西部では、スナイフェルネース半島の周遊をし、東部ではヘプンからブレイズダールスヴェイーク、エイイルスタージルをバスで行きましたが、ドライブには最高の景色で、心なごむ大平原と山並みと多くの湖、雪とのバランスで形容のない優しさで、同時に鳥の多いのにビックリ！フイヨルズの断崖には、無数の巣が作られており、バスが通う海岸には　白鳥、海鳥、鴨　等々が見られ、心なごみました。ミーヴァトン湖でのテント場も最高で多くの愛らしい鳥がテントに飛んできて興味深い光景となりました。

アクレイリからレイキャビクへの帰りはハイランド縦走のバスでしたが、途中のヴェラベリアの露天風呂は、ほぼ日本と同等の素晴らしい温泉で、またケリルラ氷河の山小屋は、日本の上高地的な場所で２－３日滞在したくなる場所で、氷河へのアプローチが最も近い所でした。

９箇所のテント場をまわりましたが、良く整備されており、管理事務所ではシャワーも追加３５０円程で入られ、温水は、必ずでておりしかも温泉です。この為、３－４日雨に降られましたが、快適に過ごせました。ただ、日本的な温泉はなく、各地にスイミングプールが設置されており、温水がでています。レイキャビクの有名なブルーラグーンは、期待外れでしたが、キャンプ地の温泉シャワーは最高でした。テント生活の米は６ｋｇ＋アルファ米３ｋｇで、現地調達食料は、約６万円で、日本よりの持込食　２万円（アルファ米、ベーコン、ラーメン、調味料、スープ、茶漬けの素、漬物、飲み物）でした。

日本の北アルプス、スイスアルプス、ヒマラヤの山々に比して、全く異質の様相で、精々トレックを楽しむ程度で、氷河登攀は楽しめるかも知れません。敢えていえばネパールのムスタン地域に似ています。山々は低いですが・・・。バスにてぶらりと周遊可能ですが、面倒ながら資料をよくみてからだと、内陸部の良さが解ると思います。



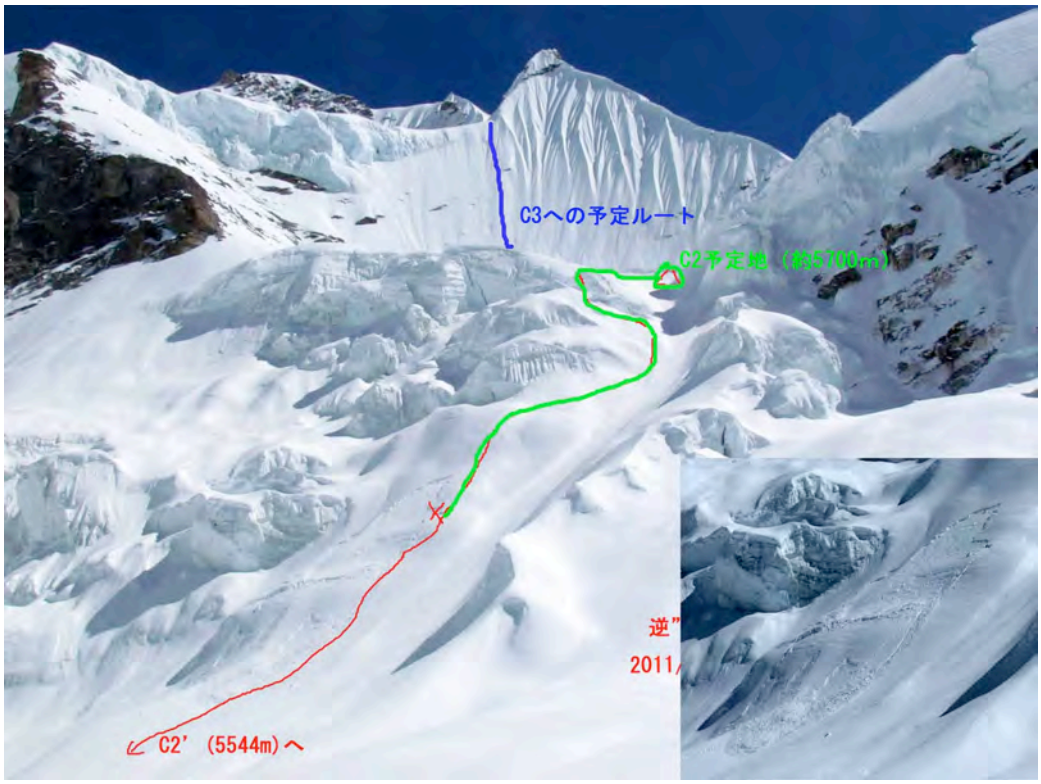
グルカルポ・リ登山　：　Ｃ１’～　Ｃ２’周辺からの眺め

写真－１（Ｃ１’デポサイト　4818m）

写真－２（Ｃ１　5300m）

写真－３（Ｃ２’デポサイト　5544m）

写真－４（逆くの字ルンゼルート、雪崩現場）



シュレックホルン山頂にて（撮影：山田　裕敏）

トレ・チメ北面（撮影：上田　忠士）

＜編集後記＞

・グルカルポ・リは、美しい山容を見せる一方、近づく者には手強い様相も示して、そう簡単には頂きに招いてくれない―さすがヒマラヤの山だと改めて思いました。

・今年９月、たまたま、日本橋・高島屋にて「犬塚勉展」を見る機会が持てました。既に２００９年の「NHK・日曜美術館」で一部紹介されてはいますが、今回は３８歳で谷川岳にて遭難死するまでの全作品を初めて展示した、のが特徴です。「縦走路」・「ブナ」・「暗く深き渓谷の入口」等を眼の前にして、まさに「今、そこに、立っている」かのように感じ入り、過去の山行を追想してしまいました。来春１月には京都・高島屋でも展示される予定なので、再度行こうと思っています。

（奥田　記）